

# 額田部氏の系譜と職掌

仁藤敦史

Genealogy and Shokushou of the Nukatabe Clan

はじめに

- ① 平群郡の成立過程
- ② 額田部氏の系譜と職掌
- ③ 「糸里図」作成の契機と年代  
おわりに

## 【論文要旨】

本稿では「額田寺伽藍並糸里図」の作成年代および作成目的を子細に検討するための基礎作業として、平群郡の成立過程や氏族の分布の考察を前提に、額田部氏の系譜と職掌を分析した。

結論としては①大和国では、県や国造国からの立郡（評）または分割が一般的であったが、例外的なのは忍海・広瀬・平群（飽波）の三郡である。三者に共通するのは、王宮を中心に独自の領域を構成している点である。奴婢や渡来系技術者の居住と密接な関係があり、有力豪族の拠点に対する倭主権の支配拠点・直轄的な役割を果たしていた。②平群郡の領域のうち、後に額田・飽波郷となる地域は、独立した地域として評制下において複雑な変遷をする。大宝令以前には、人間集団の把握に対応して、後の額田郷域の北部は所布（または添上）評、東南部（大和川と佐保川および下つ道に挟まれた地域）は山辺評として把握されたと考えられる。さらに、額田邑の熟皮集

団については、「宮郡狛人」の宮郡を飽波評に比定することが可能ならば、領域的には他評（山辺評）に属する人間集団を飛び的に支配していたことが想定される。③天武朝以前には大和・河内を中心にした天津彦根命系と山城・檜津を中心にした明日名門系という二つの系統の額田部連氏が存在した。このうち天津彦根命系の系統が推古朝には有力であったが、孝徳朝の蘇我倉山田石川麻呂事件により天津彦根命系の額田部連は一時勢力を失い、天武十三年（六八四）に宿禰に改姓した額田部連は明日名門命系と推定される。④額田寺の絵図が作成される年代と契機について、背景には額田部氏の二つの系統のねじれが背景にあり、これを解消した天平宝字二年（七五八）における額田部宿禰三当の改姓および同五年の法華寺への京南田の施入時あるいは、神護景雲元年（七六七）の称徳天皇の飽波宮への行幸時の可能性があり、いずれも造籍年や班田年に相当することを指摘した。